

補助動詞構文の文法化の初期段階の設定について

李 廷玉 (イ・ジョンオク)

About a Cline of Grammaticalization of [te]-form Auxiliary Verb

LEE Jung-og

Abstract : In this article it is considered that Japanese [te]-form auxiliary verb structure is in the process of grammaticalization from a main verb to an auxiliary verb. Based on this consideration this article discusses the morphological and syntactic characters of [te]-form auxiliary verb structure.

These [te]-form verb structure has characters such as impossibility of separation between main verb and auxiliary verb, dependency, nucleus dominance and grammatical meaning etc. However these characters cannot be seen in all the [te]-form auxiliary verb structure. All these characters are not seen in the process of the grammaticalization and this brings the consideration that this [te]-form auxiliary verb structure is in the process of grammaticalization and that there can be a cline in the process of this grammaticalization. Apart from that some Japanese dative verbs and Korean PATTA verbs are given as a bases of the argument in this article.

Centering on these points a cline of the [te]-form auxiliary verb structure is discussed in this article.

要旨：本稿では、日本語のテ形補助動詞構文は、本動詞から補助動詞への文法化の途中にあるものと看做し、その立場から、テ形補助動詞構文の形態的・統語的特徴について考察する。

テ形補助動詞構文の形態的・統語的特徴としては、①前項動詞と補助動詞との分離不可能性、②依存性、③前項動詞の格支配、④文法的な意味などが考えられる。この4つの諸特徴は、全てのテ形補助動詞構文にみられるのではない。文法化の途中段階ではこれらの諸特徴全てがみられないことから、テ型補助動詞構文は文法化の途中にあり、文法化に段階性（連続性）が存在すると考えられる。また、日本語の授受に関する動詞類の一部と韓国語の「PATTA」動詞の存在も本稿の主張の裏づけの根拠として挙げられる。

以上のような点を中心に、本稿ではテ形補助動詞構文の連続性についての考察を行う。

0. はじめに

補助動詞構文を本動詞から補助動詞への文法化の連続線上にあるものとする立場から、まずテ形補助動詞構文の形態的・統語的特徴について考察する。その後、補助動詞としての文法化の途中にあると考えられる日本語の授受に関する動詞類と韓国語の「PATTA」動詞の存在から、文法化の初期段階の存在を明らかにする。

1. テ形補助動詞のひとまとまり性

影山（1993）は、テ形複合動詞は、「語」の緊密性¹⁾に問題があり、一つの語としては認められないと述べている。イ形複合動詞は、副助詞の付加が不可能である反面、テ形複合動詞の例は、副助詞の付加が可能である。また、名詞化においても、イ形複合動詞は、名詞化が出来る反面、テ形複合動詞²⁾は、不可能である。しかし、だからといって、ただ単なる二つの動詞の

(前項動詞+補助動詞)の連続かという点、そうとも限らない。テ形補助動詞は、「語」の緊密性には問題があるが、以下のように、ひとつのまとまり性を帯びながら存在するからである。

第一、分離移動の不可能が考えられる。副助詞「ハ、サエ、モ」等以外の要素は、前項動詞と補助動詞の間に介入できない。影山での説明のように、副助詞の介入は可能であるが、以下のように、副詞類の介入はできない。

- (1) 納豆を食べてみた。
 (1-1) 納豆を思い切って食べてみた
 (1-2) #納豆を食べて思い切ってみた。

「食べてみる」という補助動詞構文は、例(1-1)のように、副詞「思い切って」が補助動詞構文の前では修飾可能であっても、例(1-2)のように、前項動詞と補助動詞の間には介入できない。

第二、補助動詞構文は依存度が高いので、例(2-1)(2-2)のように、ひとつのまとまりとしての移動は可能であるが、例(2-3)のように、前項動詞を分離しての移動は不可能である。

- (2) 私はその本を読んでみた。
 (2-1) 読んでみた、わたしはその本を。
 (2-2) 私も読んでみたその本を。
 (2-3) *私は読んでその本をみた。

というのは、「前項動詞+補助動詞」がある程度緊密性を保っている証拠でもある。ある程度という言い方は明示的ではないが、程度性の問題が大きくかわるので、こういった表現にとどまる。

第三、格支配は、前項動詞による。

- (3) ダイエット中の花子は、我慢できず、ついパンを全部食べてしまった。
 (3-1) ダイエット中の花子は、我慢できず、ついパンを全部食べた。
 (3-2) #ダイエット中の花子は、我慢できず、ついパンを全部しまった。

「パンを」のヲ格は、前項動詞の「食べる」の要求する格であって、補助動詞「しまう」の要求する格ではない。

以上の三つのテストフレームから分かるのは、日本

語の補助動詞構文は、統語的にまとまりをもつ単位であるということである。しかし、先ほど、説明したように、日本語の補助動詞構文は、副助詞の挿入ができること等から、形態的な語(morphological word)としての位置は占めにくい。

こういった特徴によって、日本語の補助動詞構文についての研究は意味の分類にとどまり、その構文上の特徴などの詳細にまでは及んでいなかったのが現状であるといえよう。

影山(1993)は、日本語学における補助動詞といわれてきたものは大部分が統語的複合動詞に相当するものの、完全に対応するわけではないとし、補助動詞を見分ける基準が明瞭とも言えないことから、独立した範疇として補助動詞なるものを立てる根拠はないとしながら、いわゆる補助動詞構文の〈受身化〉の実現のされ方の異なりを説明しているが、これこそ、補助動詞構文の二面性と程度性が存在することを明らかにする根拠になる。

補助動詞という範疇成立の妥当性を説明できないとする証拠として挙げている説明が返って、逆接的にもそういった中間的な存在が存在することを説明する手がかりとなっている。

イ形複合動詞の受身性がV2によって左右されたように、テ形複合動詞もV2によって直接受身文になったりならなかったりする³。

V2が自動詞の「～ている」「～てある」は、「いる」「ある」が自動詞であるため直接受身にならない。また、V2が他動詞の「～てしまう」は、以下のように受身化が生じない。

- (4) 桜の木を切ってしまった → *桜の木が切ってしまわれた。

しかし、同じく、V2が他動詞の「～ておく、～てみる」の場合は、基本的に受身を許容する。

- (5) 陳列台に商品を並べておいた → 商品が陳列台に並べておかれた
 (6) モルモットに新しい薬を試してみた
 → モルモットに新しい薬が試してみられた
 (7) 冷蔵庫の中をのぞいてみた → 冷蔵庫の中がのぞいて見られた
 (8) ドアをノックしてみた → *ドアがノックして見られた

- (9) 駐車場に車をいれておいた → 車が駐車
場に入れておかれた
- (10) 風呂を沸かしておいた → *風呂が沸か
しておかれた

このように、同じ、「テミル」「テオク」構文でも、「見る、置く」の原意と意味的に整合しているかどうかによって、受身化の可否が決まるのである。受身化の様相の違いは、まさに、本動詞「置く」「見る」の意味が残っているか否かによるので、「見る」「置く」の原意が残っていると判断されるのは、前項動詞の「のぞく」と「入れる（～ニ～ヲ）」「並べる（～ヲ）」によるものである。

これらの前項動詞は「置き方」「見方」を表す動詞としての解釈が可能であるからである。すなわち、補助動詞構文を考える上では、補助動詞だけではなく、前項動詞をいれた補助動詞構文として考えるべきである。

2. 日本語補助動詞構文の形態的・統語的特徴

この節では、補助動詞構文の認定の根拠として、依存性（前項動詞の省略不可）、補助動詞だけの代用不可と文法的な意味を挙げることにする。すなわち、以下の三点が、補助動詞と一般動詞（本動詞）とを分ける基準になるわけで、補助動詞たらしめる根拠になる。

古くは橋本進吉が、「補助的に用いられる」として、補助用言を設けた所以は文節として一文節でありながら、「上の語と共に文の成分となる」というその点にあった－中村（1994）引用－という指摘から分かるように、一番大きな補助動詞の特徴として考えられるのは、前項動詞に依存しているということである。

2.1 依存性（前項動詞の省略不可）

- (11) パンを食べてしまった。
- (11-1) パンを食べた。
- (11-2) #パンをしまった。

補助動詞「しまう」は、例（11-2）からわかるように、単独では使われない。単独で使われた際には、本動詞の「シマウ」の原意の解釈しか不可能になり、補助動詞構文とは異なる文を成す。

- (12) 太郎がくれた。

例（12）は「太郎が本をくれた」の省略の可能性は考えられるが、「太郎が行ってくれた」の省略としては、考えられない。同じく、「太郎が見た」も「太郎が映画を見た」の省略の可能性は考えられるが、「太郎が試験問題を解いてみた」の省略としては、考えられない。即ち、補助動詞構文において前項動詞の省略はできない。前項動詞あってからの補助動詞構文であるからである。

2.2 補助動詞だけの「ソウスル」代用の不可

「ソウスル」による代用は、動詞を中心とするまとまりを置き換えるものである。補助動詞構文においては、前項動詞の代用、例（13-1）、補助動詞構文全体の代用、例（13-2）は可能であるが、補助動詞だけの代用、例（13-3）は不可能である。補助動詞だけの代用化ができないのは、補助動詞が文法化しつつあることを物語っていることであり、これは補助動詞の依存性の証拠でもある。

- (13) 彼は大西の前の切身から一つぺらをかすめ
とって食べてみた。〈太郎物語〉
- (13-1) 彼は大西の前の切身から一つぺらをかすめ
とって食べてみた。彼女もソウシテみた。
- (13-2) 彼は大西の前の切身から一つぺらをかすめ
とって食べてみた。彼女もソウシタ。
- (13-3) *彼は大西の前の切身から一つぺらをかすめ
とって食べてみた。彼女も食べてソウシ
タ。

補助動詞の代用化ができないのは、補助動詞が文法形式の性格を帯びていることへの反証でもある。代用化は、内容語では起こるが、機能語ではおこらない。助詞や助動詞などには置き換えられないのがその例である。

2.3 文法的意味

補助動詞を一般動詞と区別する次の理由は、その文法的意味にある。補助動詞構文は二つの動詞がつながっているように見えるが、補助動詞が文法化の段階を経て、文法的意味を帯びている。単独で使われる本動詞の意味とは、違う意味を帯びている。

- (14) 「しかし、母もぼくが小さい時から、ずっと
独りで生きてきた人間ですからね。母に僕
から別れるとは言えないですよ」〈ひつじ〉

例(14)は、〈動作の継続〉という文法的な意味を伴っており、これは、補助動詞「クル」の影響である。

(15) 昨日、東京から親戚のおじさんが来た。

しかし、例(15)のように、単独で使われている場合は、〈動詞の継続〉の意味はなく、〈空間の移動〉のみを表す。

以上、一般動詞類とは異なる補助動詞固有の形態的・構文的特徴について述べた。日本語において、補助動詞構文を設定する根拠を示したことになる。

しかし、こういった独立したひとつの範疇としての特徴を持ちつつも、補助動詞構文は、文法カテゴリーの一種として扱うのには、無理があるのも事実である。なぜなら、補助動詞は、文法的な意味を持っているながらも、動詞としての活用も保っているからである。

(16) 今度一緒に行ってみよう。

また、他の文法カテゴリー、たとえば、テンスは、すべての文に現れるが、補助動詞はそうではない。また、テンスは、すべての用言に現れるが、補助動詞は、補助動詞の種類によって、前項動詞の類を選ぶ。

本稿では、こういった動詞の特徴と、文法形式としての特徴をも併せ持つ補助動詞をひとつの範疇として設定することにする。

3. 初期段階の設定

補助動詞構文の設定基準のひとつである動詞自身が要求する格支配関係を考えてみる。

(17) 彼は学校に歩いてきた。

(18) 彼は近頃髪の毛が薄くなってきた。

例(17)は、「学校に」と共起しているため、補助動詞形とは言え、本動詞としての性質を失っていないことが分かる。補助動詞形とは、テ形とイク・クルが繋がっている形式で、この場合、テ形の意味分類として知られる、付帯状態、継起、原因、並列の内、原因、並列は現れない。

(19) *彼は学校に驚いてきた。

原因の意味になりやすい無意思動詞⁴を入れて作例してみたが、この文は自然さに欠ける。実際の例をみてみても、原因、並列の例文は存在しない。

また、補助動詞形というのは、明示的な用語とは言えないが、テ形と「イク・クル」が繋がって存在する場合、例(17)のように、「イク・クル」がある程度本動詞性を持っているとはいえ、単独で使われる本動詞の「イク・クル」とは異なることを表している。単独の「イク・クル」は、起点を表す「カラ」と共起できるが、本動詞性を帯びる補助動詞形の例(17-1)は、起点を表す「カラ」とは共起出来ないからである。

(17-1) *彼は自分の家から学校に歩いてきた。

一方、例(18)は、「クル」の格体制を守っておらず、意味も空間移動から、時間移動ともいえるアスペクト的な意味へと抽象化していることから、文法化が進んでいるといえる。

(20) 彼はパン屋でパンを買ってきた。

(20-1) *彼は家にパン屋でパンを買ってきた。

例(20)は、例(20-1)のように、「クル」の要求する着点句との共起は不可能であり、場所を表す「パン屋で」は、「クル」ではなく、前項動詞の「買う」により必要とされているものである。この点、例(18)と似ており、補助動詞化が進んでいるようにもみえるが、クルの空間移動がまったくなくなったともいえないので、例(20)は、例(17)と例(18)の中間的な段階で、文法化の初期段階であるといえる。こういった例の存在は、本動詞の補助動詞化へと連続線上にあることを示してくれる好例である。

文法化の認定においては、こういった統語的な認定基準を考えるべきであるが、それが絶対的な基準ではなく、意味的な側面を視野にいれ、初期段階の存在も認めつつ、連続的な様相を描いていく必要があると思われる。

4. 初期段階の設定の裏づけ

4.1 前項動詞+「与える、よこす、わたす」

補助動詞構文を、本動詞から補助動詞への文法化の連続線上にあるものと見た上での考察である本稿からすると、いわゆるヤリモライ補助動詞構文も、本動詞

から補助動詞構文へと文法化の道をたどっている。この授受表現は、物の授受というのが基本で、他の物の授受を表す「与える、よこす、渡す」等との相違点はいくつか存在する。

しかし、これらの「与える、よこす、わたす」等は、「やる、くれる」と違って、補助動詞化が進んでいない。これらの動詞がテ形と連結している際の例を取り上げてみると、そのテ形は、物の授受を表す類の動詞類に制限されていることが分かる。

「与える」は、「子供におもちゃを買って与える」のように、具体的な物の受け渡しがある場合の一部で補助動詞的にも用いられるが、抽象的に「*教えて与える」とは言えないことから考えても、これは継起的な「買う」のテ形に「与える」が付いたものと考えられる。山田（2000：102注1）とあるように、「与える」とテ形との連結についての指摘がある。

4. 1. 1 「テアタエル」

- (21) 山本の買って与えた薔薇の花が、花瓶いっぱいになさしてあった。〈山本〉
- (22) 源氏は二、三日、宮中にも出仕せず、紫の君を手なずけるのにかかっていた。
姫君へ、そのまま手本になるように、と思
い、字や絵をかいて与えた。〈新源氏〉
- (23) 源氏は舎人たちに着物を脱いで与え、そのいろいろは、まるで秋の紅葉を風が吹き
ひるがえすばかりだった。〈新源氏〉
- (24) 運命は彼が表面的に望んでいたものをすべ
て与えた。陰険に皮肉に与えてくれた。
〈沈黙〉（「ヤリモライ+与える」の承接は
不可能）

「テアタエル」の実例をみると、前項動詞には、モノの生産を表す「買う、書く」（例（21）（22））などの生産動詞、モノの授受を表す「与える」（例（24））、対象変化他動詞の「脱ぐ」などが来やすい。また、例（23）から分かるように、「舎人たちに」の二格は、前項動詞の「脱ぐ」ではなく、「あたえる」の要求する格であることが分かる。

4. 1. 2 「テワタス」

- (25) そして、与平に挨拶をし、持っていた包みをあけて、少ないけれどみなさんでひと口ずつ、と云いながら切餅の包みを取って渡し、あとの包みを持って栄二のほうへ来

た。〈さぶ〉

- (26) 自分の行く美容院では、お客に店の月報み
たいな物を作って渡している。〈錦繡〉
- (27) 「見る人の心々にまかせおきて雲井にすめる秋の夜の月」という和歌を一首書いて渡した。〈山本〉
- (28) 「少しあるだろう」とこういってその内の一人が立ち止って自身の水筒を抜いて渡した。〈小僧〉

「テワタス」の実例も、「テアタエル」同様、前項動詞として、「取る」「書く」「作る」などの生産動詞、「抜く」などの対象変化他動詞が多い。また、格支配においても、例（26）から分かるように、「渡す」の格支配を従っていることがわかる。すなわち、これらの例は、モノの授受を表す場合で、前項動詞と「ワタス」には時間的継起関係を成している。

4. 1. 3 「テヨコス」

- (29) 「見てみろ、ひどい器量だ」山本は言いながら望遠鏡を息子に返してよこした。
〈太郎〉
- (30) ともかく君はかかる内部の葛藤の激しさに堪えかねて、去年の十月にあのスケッチ帖と真率な手紙とを僕に送ってよこしたのだ。〈小さき〉
- (31) その後は岡安も諦めたのか、しいて会わせようとはせず、差入れの品だけを部屋へ届けてよこした。〈さぶ〉
- (32) 黒が炊事室の建物の陰からわずかに手をだしてみせ、大丈夫だ、としらせてよこした。

「テヨコス」は、「テアタエル」「テワタス」に比べると、抽象的なものの授受（例（32））等もあること、格支配が前項動詞に従っているのか、「よこす」によるのか、不明ではあること、前項動詞と「よこす」との関係が時間的継起関係を成していないこと、等の理由からして、補助動詞構文に近づいている形式であるといえよう。

しかし、本動詞「アタエル、ワタス」が補助動詞形式として使われた際、新しいモノの生産、対象変化を表す前項動詞類と共に使われ、新しいモノの授受を表している点で、補助動詞の文法化の初期段階を表していることが分かり、この現象は、「テアゲル」「テクレ

ル」においても、モノの授受を表す例は、文法化の初期段階であることを物語っているといえよう。

4.2 韓国語の「PATTA」

日本語において、やりもらい動詞「やる(あげる)／くれる／もらう」は、物の授受を表すと共に、様々な動詞と結合して、利益行為を表す文法形式として発達している。

韓国語においても、「주다CHUDA」動詞は、日本語と同じく、物の授受を表すと同時に、様々な動詞と結合して、利益行為を表す文法形式として発達している。しかし、日本語の「もらう」動詞に該当する韓国語の「받다PATTA」の場合は、授受動詞としては、生産的に使われるが、利益行為を表す文法形式としては、発達していないといわれている。

〈日本語・韓国語・英語の授受動詞〉

日本語	韓国語	英語
くれる くださる	주다CHUDA 주시다CHUSIDA	GIVE
やる あげる さしあげる	주다CHUDA 드리다TURIDA	
もらう いただく	받다PATTA RECEIVE	

奥津(1979: 25)にも、「ところが、朝鮮語には「～てもらう」にあたる表現がない。PATTAはあるが、それを補助動詞として使うことができない。つまり朝鮮語では受け手主語の恩恵授受構文はないわけである」のような指摘があり、韓国語の「받다PATTA」構文が補助動詞構文として発達していないことについて言及している。

庵 他(2000: 115)では、「恩恵を表す補助動詞表現は韓国語やタイ語などにも見られますが、英語などの西洋語には見られない表現です。韓国語の授受表現は「(～て)やる」と「(～て)くれる」の区別がなく、また補助動詞としての「～てもらう」の用法がないなど、細部では日本語のそれとは違っています」といった言及もある。

しかし、実際、例文を集めてみると、「A PATTA」の形で使われる例を見つかることができる。しかし、これらの例の共通点もやはり、具体物の授受であることが分かる。

- (33) 나는 전해받은 (chonebadun/ 手渡してもらった) 것이라 내 힘으로 허물 수 없었으. 나머지 통장 (通帳) 은 되돌려받아 (dhedoryobada/ 返して貰って) 그 즉시 태워 버렸다.
- (34) 계약되어 있던 작품 (作品) 을 케이비에스에 서는 그대로 이어 받아 (iobada/ 受け継いでもらって) 방영코자 했어요
- (35) 아내가 그 어머니로부터 물려받아 (muryobada/ 譲ってもらって) 가지고 시집 왔던 둥그런 면경 (鏡) 도 빼앗아 놓을 ...
- (36) 메고 있던 장총을 옮겨 메고는 최윤 (崔ユン・人名) 을 넘겨받아 (nomgyobada/ 渡してもらい) 오른손으로 최윤의 옆구리를 찼다..
- (37) 친구한테 빌려 준 책 (本) 을 건네 받기 (gonne paki/ 渡してもらうことに) 로 했다.

韓国語の「A PATTA」構文は、日本語の受益構文とは対照的に生産的ではない。しかも、これらの動詞も物の授受性が残っている動詞であるので、授受性を色濃く持っている前項動詞に限って受益が存在しており、物の授受性の延長に存在している程度であることが言える。例(33)は「통장(通帳)」, 例(37)は, 「책(本)」という、モノの授受性が大いに残っている。韓国語の「A PATTA」構文は、日本語の受益構文とは対照的に生産的ではないにも関わらず、実例をみると、モノの授受に関係する場合は、成立することが分かる。

日本語の「テワタス, テアタエル」, 韓国語の「A PATTA」の存在は、補助動詞構文の文法化を連続線上のものとして捉える際、その初期段階の設定を裏付ける根拠となると考えられる。

主な参考文献

- 庵 他(2000)『日本語文法ハンドブック』スリーエーネットワーク
 影山太郎(1993)『文法と語形成』ひつじ書房
 仁田義雄(1995)『複文』くろしお
 山田敏弘(2000)「『連載 日本語におけるベネファクティブの記述的研究』『日本語学』2000. 11. VOL.19
 강현화 (姜) (1998)『국어의 동사연결 구성에 대한 연구 (国語の動詞連結構成に関する研究)』한국문화사 (韓国文化社)

用例出典

- 日本語：新潮文庫 100冊 CD
 韓国語：강 (姜) (1998: 56)

- 1) 影山(1993: 10~11)は、語の形態的な緊密性として、形態的な不可分性、統語的要素の排除、外部からの修飾の禁止、語彙照応の制約を挙げている。
- 2) 影山の用語で本稿のテ形補助動詞に当たる。
- 3) 例(4~10)は、影山(1993: 170~172)からの引用である。
- 4) 仁田(1995: 107)「〈時間的継起〉の典型は、シテ節と主節がともに意志動詞で形成され、両者の主体が同一のものである。無意志動詞での形成や異主体の可能性の高さは、〈起因的継起〉を〈時間的継起〉から分かつ一つの特徴である」との指摘を受けての作例である。